

虹

新時代に縁つなぐ

①97 YouTuber「かんちゃん住職」



YouTuberに投稿する動画を撮影する谷川さん

突き抜けたような笑顔をカメラに向け、収録が始まった。

「はいっ！みなさん、こんにちは。『かんちゃん住職』です！。ハスキーな声で元気いっぱいにあいさつするのは、魚津市の真成寺で副住職を務める谷川寛敬さん(49)。YouTuber(ユーチューバー)である。

投稿した動画は、この4年間で約1000本。「実際にあったお葬式でのタブー行為」や「7割の人が知らないお墓NG行為」といったタイトルの動画は100万回以上再生されている。チャンネルの登録者数は23万人を超える。

再生回数を伸ばすには、タイミングが重要という。7月末にアップした動画では「お盆期間中のNG行為」を取り上げ、「単なる迷信ではなく、先人たちの深い思いや心配りが込められているんです」と流れるような口調で説明する。

テロップや効果音はYouTubeっぽい、内容は先祖供養や縁の大切さを説くお坊さんの説教だ。瞑想や占い、手相、靈感などを取り上げた動画も仏教に基づいている。「仏教を知ってもらうのが本丸。チャンネル登録者は、未来の檀信徒だと思ってるんです」

◇

真成寺は、戦国時代の1517年に創建された日蓮宗の寺院。谷川さんはその由緒ある寺に生まれた。3人きょうだいの唯一の男児で、家族や檀家から将来の跡取り息子と期待されて育った。祖父で先代住職の故寛徳さんからは「偉い人ではなく、立派な人になりなさい」と教えられた。

やんちゃな子どもだった。曲がったことが大嫌い。中学生の頃、カツアゲされた友人に助けを求められ、いじめっ子を絞り上げ、お金を取り返した。酔っばらって立ち小便する大人に食ってかかることもあった。

勉強をする意味が分からず、学校の成績は悪い。周りから見ればヤンキー。母親の久仁子さんと一緒に菓子折りを持って謝りに行くこともしばしばあった。母からは厳しく叱られたが、「あなたの味方だから」と寄り添ってくれた。

中学を卒業し、山梨県にある日蓮宗系の高校に入学した。寺に住み込んで修行しながら通えば、学費や生活費が免除される。「親への罪滅ぼしのつもり」で選んだ進路だった。

修行生活は過酷だった。1年生は名前ではなく、新しい兵隊を意味する「新兵」と呼ばれた。上級生の身の回りの雑用をするのが日課。トイレの掃除は、便器を素手で洗う。部屋では常に正座し、私語は禁止。当時は体罰が当たり前の時代で、ミスがあれば、上級生からの制裁が待っていた。

夜には反省会。ノートに書いた反省文を上級生にチェックされる。明け方近くまで叱責を受け、睡眠が1時間という日もあった。お勤め中にうとうとすれば、また締め上げられる。谷川さんは自分の足にくぎを刺し、眠らないようにしていた。

そんな生活に耐えきれず、脱走する人も多かった。50人いた同期で残ったのは10人。だが、谷川さんは音を上げなかった。

——親にさんざん迷惑をかけてきたのに、どの面を下げて帰るんだ。



「秋遊」西治宇

翌年、後輩が入ると、過酷な状況から解放された。だが、今度は自分が後輩に理不尽な仕打ちをしていると気付いた。後輩に頼み事をするのをやめ、自らトイレ掃除をした。その後、寮長になった時には規定を変え、理不尽で度が過ぎた暴力を禁じた。

◇

厳しい修行の中で、実家での生活が恵まれた環境だったと気づき、家族や檀信徒に感謝の気持ちが湧いてきた。「恩返しに何ができるかといったら、立派になって帰ることだ」。僧侶になる覚悟を決めた。

勉強は苦手だったが、本を読んで学ぼうと決めた。書店に行き、小遣いでためた1万円で自己啓発本や哲学書を買えるだけ買った。が、1行も読めない。予定表を作り、毎日読書の時間を設けた。最初は文字を目

で追うだけだったが、次第に読めるように。学ぶことに楽しさを感じ、暇があれば本を開き、月に10冊以上は読むようになった。「人は変われるということ、自分で体感した」

立正大(東京)に進み、米国に短期留学した後、実家に戻った。副住職に就いたものの、僧侶としての経験や知識が少ないままでは、檀家の人たちに失礼な気がした。肩書があるだけで、偉そうにする人間にはなりたくなかった。

「早くプロにならなければ」。焦りにも似た気持ちがあった。宗派の研修を受け、僧侶として取得できる資格は20代のうちにほとんど取った。

「世界三大荒行」とされる日蓮宗の荒行も経験した。100日間の修行を終えた僧侶だけが、祈禱をできるようになる。寒さや

飢えに耐える命懸けの修行を、谷川さんは3度やり遂げた。説教を学ぶ機関を最年少の29歳で卒業し、全国各地の寺や企業、病院などで講演するようになった。

だが、コロナ禍で講演の予定はほとんど白紙になった。それでも話を聞きたいという声寄せられ、始めたのがYouTubeだった。

「寺離れ」への危機感もあった。高齢化が進み、寺の行事に来られない人が増えた。核家族化で、信仰が次の世代に継承されない。「今は寺で待ってる時代じゃない」と考えた。父親で住職の寛俊さん(77)に相談すると、「やりたいようにやればいい」と後押ししてくれた。

動画編集を一から学び、試行錯誤を重ね、投稿を続けた。チャンネル登録者数や再生

回数は徐々に増えていった。

◇

「かんちゃん住職は、私の中では芸能人に近い感覚ですね。嶋田恵子さん(45)は谷川さんの大ファン。動画がきっかけとなり、昨年に香川県から魚津市に移住した。

3年前、命と時間がテーマの動画がたまたま目に入った。当時働いていた鮮魚店での人間関係に悩み、人手不足による忙しさで疲れていた。谷川さんの言葉を聞き、涙が出た。「現実にか何か変わったわけではないんですけど、気持ち軽くなった」。コメントを書き込み、動画を全てチェックした。もともと魚が好きで、鮮魚店で働いていた。谷川さんに会うために真成寺を訪れた際、富山湾が近く、海の幸が豊富な魚津に魅力を感じ、引っ越しを決めた。今はスーパーの鮮魚コーナーで働きながら、真成寺の行事に参加し、悩みも聞いてもらう。「真成寺が近くにあるってだけで心強い。何か安心感があるんです」

◇

光があれば、影がある。人気YouTuberとなった谷川さんには、アンチから心ないコメントが寄せられることも少なくない。発言がSNSで炎上するリスクもあるため、話す内容には気を配る。

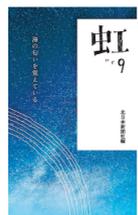
以前、祈禱や読経の動画を配信したところ、他の僧侶から「お経を軽んじている」「娯楽に使うべきではない」と非難された。一方、コメント欄には「心が洗われるよう」「配信ただけで感謝」などと肯定的な意見が並んだ。今では同業者からの批判はなくなった。

全国から真成寺に祈禱を受けに来たり、行事に参加したりするファンが増えた。相談のメールは1日に1000件以上も寄せられ、返信するのに2~3時間かかる。

多忙な日々だが、新たな縁をつなぐため、YouTubeの投稿は続けている。伝えたいのは、人は変われるということ。「一歩踏み出す勇氣を持って、自分の人生を切り開いてほしい」。そんな思いを胸に、また収録用のカメラに向かう。

「こんにちは！かんちゃん住職です！」

YouTubeはサムネイル(動画の内容を表す縮小画像)が命。谷川さんは複数のパターンをアップし、最終的にはアクセス数が最も多いサムネイルにするそう。シビアなマーケティングの世界です。笑顔の裏には、人知れぬ努力があります。



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えて』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたまをエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は10月1日(水)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局